

メッセージアウトライン 出エジプト記3:1~22 「モーセの召命」

モーセはイスラエル人のレビ部族に属する両親によって生まれた子であったが、エジプトのイスラエル人に対する過酷な取り扱いの中で、神の不思議な摂理によりエジプトの王（ファラオ）の娘の子として育てられた。しかし、彼は幼年期に実の両親のもとで育てられたことにより、イスラエル人の自覚をしっかりと持っていた。彼が四十歳の時、同胞イスラエル人がエジプト人によって打たれていたのを見て、そのエジプト人を打ち殺して砂の中に埋めた。次の日、今度はイスラエル人どうしが争っているのを見て、これを止めに入ると、相手の男は「だれがおまえを、指導者やさばき人として私たちの上に任命したのか。おまえは、あのエジプト人を殺したように、私も殺そうというのか」と食ってかかられた。彼は同胞のイスラエル人から受け入れられなかった。やがてモーセがエジプト人を殺したことがファラオの耳に入ると彼はモーセを殺そうと探し求めた。しかし、モーセはエジプトから逃走し、はるか離れたアカバ湾に面したミディアンの地にまで逃げた。彼はそこで妻をめとって羊飼いとして四十年間過ごすこととなった。彼は小さい時に実の両親から、なぜ自分たちがエジプトに住むようになったか、なぜエジプト人に苦しめられるようになったかを教えられていたであろう。そして神が先祖たちに与えられた契約によって、いつかはイスラエル人が神の約束してくださったカナンの地へ帰してくださるという希望も語られていたであろう。そして彼はエジプトのあらゆる学問、知識を教えられ、四十歳になった時には心身ともに充実して、自分こそイスラエルを解放することができる力を持つものだと思っていたかもしれない。しかし、彼は同胞イスラエル人には受け入れられず、エジプトの王ファラオからは殺人者として追われ、ついに失意と逃亡の果てに、はるか離れたミディアンで一介の羊飼いとして四十年を過ごすものとなった。もはや彼には血気盛んだった頃的情熱はなく、聞こえるのは羊の鳴き声や荒野を渡る風の音だけという大自然の静寂の中で、淡々と孤独な日々を過ごしていたことであろう。この時彼は八十歳でもう老境に入っている。あとはこのまま天寿を全うして人生を閉じるだけと思っていたかもしれない。→出エジプト記2章、使徒7:17~30

しかし、どっこい、これからがモーセが神によって用いられる時であったのである。神は力にあふれ、血気盛んで、俺が、俺が、我こそはというギラギラした自分の力により頼むような人物を用いられない。そうではなく、心砕かれて、自己を空しくし、自分は神の前に何者でもない、無に等しい存在だということに気づかさされ、謙遜になって、神のみに寄り頼もうとするそのような人物を用いられ

るのである。

[1]「モーセは、ミディヤンの祭司、しゅうとイテロの羊を飼っていた。彼はその群れを荒野の奥まで導いて、神の山ホレブにやって来た」

「イテロ」2:18では「レウエル」という名で出てくる。彼は二通りの名前を持っていたと思われるが、イテロは祭司としての公職に就く者に受け継がれていた名前であったかもしれない。

「荒野の奥、神の山ホレブ」これはシナイ半島の南の中央部にある標高2285mのシナイ山のこと。→19:11,申命記4:10

[2]「すると主の使いが、柴の茂みのただ中の、燃える炎の中で彼に現れた。彼が見ると、なんと、燃えているのに柴は燃え尽きていなかった」

イスラエルの先祖ヤコブ以来（創世記32章）、このモーセの時まで、四百年以上も神の現われはなかった。しかし、今ついに神の時が来て、神ご自身のみこころを示すために、主の使いを送られたのであった。この燃える柴は一般にはアカシアの木であったと考えられている。木が燃えればやがて焼き尽きてしまうはずであるが、この柴はそうではなかった。この不思議な現象は神によるものであった。

[3-4]「モーセは思った。『近寄って、この大いなる光景を見よう。なぜ柴が燃え尽きないのだろう。』主は、彼が横切って見に来るのをご覧になった。神は柴の茂みの中から彼に「モーセ、モーセ」と呼びかけられた。彼は、『はい、ここにおります』と答えた」

モーセはまだこの時点では、誰に名前を呼ばれたのかわかっていなかったであろう。

[5]「神は仰せられた。『ここに近づいてはならない。あなたの履き物を脱げ。あなたの立っている場所は聖なる地である』」

そこは寂しい荒野で神殿も何もない所であったが、神が臨在される場所はどこであっても、それはすなわち聖なる地となる。「履き物を脱げ」とは自分が神の前ではしもべであることの自覚と、聖なる方の前に立つ者としての心構えを神が求めておられるのである。

[6]「さらに仰せられた。『わたしはあなたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。』モーセは顔を隠した。神を仰ぎ見るのを恐れたからである」

ここで初めてモーセは自分に語りかけておられるのがイスラエル民族の先祖を守り、導き、祝福の契約を結ばれた神であることに気がついた。それで彼は恐れて顔を隠したのであった。

[7]「主は言われた。『わたしは、エジプトにいる私の民の苦しみを確かに見、追いついて立てる者たちの前での彼らの叫びを聞いた。わたしは彼らの痛みを確かに知っている』」

「見」「聞いた」「知っている」…神は全知全能であるが、あえてこのような人間的な表現を使って、神が確かに行動を開始されたことを強調しているのである。[8-10] 神はモーセにご自身の計画とモーセのなすべき役割を告げられた。それは、イスラエル人をエジプトから救い出し、約束のカナンの地に上らせるためにモーセを指導者として用いることであった。そのために神はモーセをファラオのもとに遣わされるのである。

「父と蜜の流れる地」…家畜を養うための牧草が豊富にあり、蜜蜂が好む草花や樹木が繁茂する地。農産物が豊かにとれる地。「カナン人、ヒッタイト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人」…カナンの地の先住民。

[11]「私は、いったい何者なのでしょう。…」

以前の四十歳の頃のモーセならば進んでその働きに飛び込んでいったであろう。しかし、ミディアン人の荒野の四十年で自己の無力を知り。謙遜を学んだ今のモーセは以前のモーセではなかった。彼は当惑し、しり込みをする。

[12]「わたしが、あなたとともにいる」…モーセにとって必要なのは彼自身の人間的な力でも知恵でもなく、神がともにおられることであり、「このわたしがあなたを遣わすのだ」という事実であり、それがモーセに与えられた「しるし」なのであった。そして神はこのモーセがエジプトから導き出した民をこのホレブの山、すなわちシナイ山で神に仕えること、つまり礼拝すべきことも告げられた。

[13]モーセは神に言った。「今、私がイスラエルの子らのところに行き、『あなたがたの父祖の神が、あなたがたのもとに私を遣わされた』と言えば、彼らは『その名は何か』と私に聞くでしょう。私は何と答えればよいのでしょうか」

この問いは原文では単なる神の名以上の神の本性についての質問となっている。

[14]神はモーセに仰せられた「わたしは『わたしはある』という者である」

「わたしはある」…「エヘイエ・アシェル・エヘイエ」 (I am who I am)

「ある」と訳されている動詞の形は「ハーヤー」(存在する)の未完了形一人称単数であり、これはある事柄の継続した状態を示す。当時の古代ヘブル語には定まった時制はなく、それゆえこのことばは「私は存在していた」「私は存在している」「私は存在し続けるであろう」のどの意味にもなる。そのようなわけで、このことばは神の自存性、統一性、永続性を表すのに最適なことばと言える。今日、神の御名は「ヤハウエ」(YHWH)であると理解されているが、それはおそらくこの「わたしはある」に由来すると多くの学者は考えている。

[15]神はさらにモーセに仰せられた。「イスラエルの子らに、こう言え。『あなたがたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主が、あなたがたのところを私を遣わされた』と。」これが永遠にわたしの名である。これが代々にわたり、わたしの呼び名である。

ここに記されている太字の「主」(アドナーイ)ということばがなぜ「神」の名に当てられるようになったかと言えば、十戒の第三戒(出20:7)に「あなたは、あなたの神、主の名をみだりに口にしてはならない。主は、主の名をみだりに口にする者を罰せずにはおかない」とあるように、後の時代になると、イスラエル人は神の名を発音するのは恐れ多いので「主」(アドナーイ)ということばで読み替えるようになり、それで今日の聖書でもそのような読み方が用いられて「主」ということばが当てられているのである。この神、イスラエルの先祖の神がモーセをイスラエルの民に遣わされるのである。

[16-17] 16節以下では神の救いの実際的な計画が述べられていく。まず、モーセがエジプトに下って行って、イスラエルの長老たちを集めて神から受けたことばを伝える。その内容は「わたしは、あなたがたのこと、またエジプトであなたがたに対してなされていることを、必ず顧みる。…あなたがたをエジプトでの苦しみから解放して…乳と蜜の流れる地へ導き上る」であった。

[18] 長老たちはモーセの声に聞き従うので、モーセは彼らと一緒にエジプトの王のところに行き、ヘブル人の神、主が私たちにお会いくださったので、荒野へ三日の道のりを行かせ、いけにへを献げさせてくださいと願え。

[19-20] 「しかし、エジプトの王は強いられなければあなたがたを行かせないことを、わたしはよく知っている」そこで神は、エジプトの王(ファラオ)のかたくなさに対してあらゆる不思議を行い、エジプトを打たれる。そうして後に彼はイスラエルを去らせることになる。

[21-22] 神はエジプト人がイスラエル人に好意を持つようにされ、イスラエル人がエジプトを出て行く時には金や銀、衣服などを求め、それらを与えられて出て行くことになる。

これがイスラエル人に対する神のご計画であった。このために神はモーセを指導者としてお用いになろうとしているのである。かつて彼が四十歳の血気盛んであった時には神は彼を用いられなかった。そのためには彼は荒野で四十年間羊飼いでして過ごし、謙遜と自己の無力さを学ばなければならなかった。人間的に見れば盛りを過ぎて、老境に入っているモーセを神は用いられるのである。それは神がこのようなモーセを通してその御力を十分に現わされるためであった。

荒野の柴のような無価値な木でも神が臨在されるならば、いつまでも燃え尽きることなく燃えていることができる。モーセも人間的にはもう老人であるが、そのモーセに「わたしはある」と言われる永遠、不変、無限で全能の神がともにいてくださる時に、すばらしい働きができるようになるのである。

私たちも人生において、さまざまな苦しみや悲しみ、逆境の中を通されることがある。しかし、それは神を信じる私たちが砕かれ、整えられ、謙遜にさせられ、この世的な物や力に頼ることのむなしさを知り、信仰をもって神を見上げる以外

に他にないということを学ばせられている時なのかもしれない。そして、ちょうどよい時に神は私たちをモーセの時のようにご自身のご計画のために用いてくださるであろう。

神は聖く、ご自身のみことばに誠実なお方で、決して私たちを裏切ったり、途中で投げ出してしまわれるようなお方ではない。私たちは今、どこに置かれているにしても、このお方を心から信頼して従い続ける者になりたい。→ヘブル11:1~2、24~27